

生命健康科学部学生の自己教育力（第3報）

—入学後2年半の変化—

The Third Report

Analysis of Self-Directed Learning in Chubu University

—Investigation on Life and Health Sciences Students

From School Entry to The Third Year —

牧野 典子

中山奈津紀

堀井 直子

山田 聡子

井口 弘子

渡邊 実香

足立はるゑ

Tsuneko MAKINO
Hiroko IGUCHI

Natsuki NAKAYAMA
Mika WATANABE

Naoko HORII
Harue ADACHI

Satoko YAMADA

要 旨

われわれは、自己教育力育成に関連した教育的要因を明らかにするために、平成18年度から学部学生を対象にした自己教育力の縦断的調査を開始した。昨年は入学直後から1年間の調査を通して、入学後に自己教育力平均得点が低下する傾向について考察した¹⁾。今回は、入学から2年半（1期から5期まで）の調査を通して、次のことが明らかになった。

- 1) 自己教育力の平均総得点は、入学時が最も高く3期に最低となり ($p<0.05$)、5期に増加した ($p<0.05$)。
- 2) 自己教育力の側面Ⅰは、2期に最も低くなり ($p<0.001$)、3期、4期、5期に再び高くなった ($p<0.001$)。
質問では目標に向かって努力する気持ちや資格や学位の取得に関連する項目の得点が高くなった。
- 3) 側面Ⅱは2期に高くなった ($p<0.05$) が3期と4期に低下し ($p<0.05$) 5期に最低となった ($p<0.001$)。
- 4) 側面Ⅳは入学時と2期と4期が高く、1期と3期と5期が低い。2期と3期間には有意差が認められた ($p<0.05$)。
- 5) 自尊感情は入学時より3期に最も低下した ($p<0.001$) が、4期、5期に増加した ($p<0.001$)。
- 6) 自己教育力平均総得点と側面、平均総得点と自己効力感および自尊感情との間に、正の相関がみられた ($p<0.001$)。
- 7) 情報及び視聴覚システムの活用や図書館の利用回数は、1期、2期、3期より4期、5期が有意に増加していた ($p<0.05$)。

以上から、自己教育力の得点変動は、自己効力感や自尊感情、入学後の目標、情報あるいは視聴覚システム、図書館の利用などとの関連性が示唆された。

キーワード：自己教育力，大学生，自己効力感，自尊感情

I. はじめに

本調査の対象である学生は、病気予防や健康増進の専門家あるいは看護専門職としての専門能力だけでなく、卒業後も社会の変化に対応できる能力を期待されている。大学教育に携わる者は、学生の専門職者としての人間形成を基盤とした、生涯にわたる自己研鑽に必要な技能を教授する責任があると考えられる。

1983年に文部省は「主体的に学ぶ意思、態度、能力」として自己教育力を提案した²⁾。そして、梶田³⁾は自己教育力の育成状態の評価項目を明らかにし、自己教育性の柱として「成長・発展への志向」、「自己の対象化と統制」、「学習の技能と基盤」、「自信・プライド・安定性」を明らかにした。対象の学生は、初等・中等教育において自己教育力の育成教育を受け、大学では専門職の自己教育力を修得する過程にある。その修得状況を明らかにする為には、入学してから4年間の変化と関連要因を縦断的に調査する必要がある。

われわれは、平成17年度から自己教育力育成を促す教育について研究し、自己教育力育成に関連する要因を文献により明らかにした⁴⁾。検討されている関連要因は、自己効力感、自尊感情、臨地実習、演習、情報システムの利用、年齢、学科、同居の有無などであった。しかしながら、これまでの研究は横断的な調査が多く、入学から卒業まで縦断的に検討したものは見当たらない。そこで、平成18年度から本学部学生を対象とした縦断的調査を開始し、その結果を2007年⁵⁾、2008年¹⁾に報告した。

今回は入学から3年生春学期終了までの2年半に5回の調査結果から、前回は報告した内容を一部繰り返ししながら、自己教育力の変化を明らかにし関連する要因について検討した。

II. 研究方法

1. **対象**:平成18年度生命健康科学部入学生140名(入学時)中、協力を得られた学生の調査票。

2. **調査時期**:入学時調査は平成18年4月、1年春学期終了後(以後1期とする)は平成18年9月、1年秋学期終了後(以後2期とする)は平成19年3月、2年春学期終了後(以後3期とする)は平成19年9月、2年秋学期終了後(以後4期とする)は平成20年3月、3年春学期終了後(以後5期とする)は平成20年9月に実施した。

3. **調査方法**:入学時、各学年の春、秋学期の終了時に研究目的を説明し自記式調査票を配布した。対象者が無記名で回答した調査票を出口に設置した回収箱に投入した。

4. **調査票の内容**:調査票は自己教育力の育成状態を計る自己教育力測定尺度と、関連要因の自己効力感測定尺度、自尊感情測定尺度、自己学習時間、情報システム利用頻度、対象の属性として年齢、性別、所属する学科・学年、入試形態、同居の有無で構成されている。

1) **自己教育力**:西村ら⁶⁾が、梶田³⁾の自己教育性尺度に10項目を追加し、信頼性と妥当性を検証した自己教育力測定尺度40項目を用いた。自己教育性尺度は4側面で構成されており、側面Ⅰは「将来、他の人から尊敬される人間になりたい」、「これから専門的な資格や学位などを取りたい」など10項目から成る「成長・発展への志向(側面Ⅰとする)」である。側面Ⅱは「自分のよくないところを自分で考え直すよう、いつも心がけている」、「自分の良いところと悪いところがよくわかっている」など10項目の「自己の対象化と統制(側面Ⅱとする)」、側面Ⅲは「自分の調べたいことがある時に図書館(室)を利用している」、「自分に必要な文献や記録を分類・整理しておく習慣がある」など10項目の「学習の技能と基盤(側面Ⅲとする)」、側面Ⅳは「自分のやることに自信を持っている方だと思う」、「自分にもいろいろとやりがいがあると思う」など10項目の「自信・プライド・安定性(側面Ⅳとする)」である。回答方法は各質問に対し「あてはまる5」、「ややあてはまる4」、「どちらともいえない3」、「ややあてはまらない2」、「あてはまらない1」の5件法である。

2) **自己効力感**:坂野と東條⁷⁾が信頼性と妥当性を検証した一般性セルフ・エフィカシー尺度(GSESとする)16項目を用い、「はい1」、「いいえ0」の2件法で回答を求めた。

3) **自尊感情**:Rosenberg, M.が作成した自尊感情測定尺度の邦訳版⁸⁾(SEとする)10項目を用い、「あてはまる5」、「ややあてはまる4」、「どちらともいえない3」、「ややあてはまらない2」、「あてはまらない1」の5件法で回答を求めた。

4) **各学期の学習状況**:入学時以外の調査票には以下の項目を追加した。①自己学習に要した1日平均時間、②各学期に履修した科目の中で「よ

く勉強したと思う科目」の有無、科目名、「自分にとって有益だった科目」の有無、科目名、③インターネットおよび図書館の月平均利用回数、④大学内ネット利用回数、学科内視聴覚システムの月平均利用回数などを質問し、「ある 1」、「なし 0」の 2 件法と記述式で回答を求めた。

5. 分析

自己教育力、GSES、SE は、得点が高いほど自己教育力、自己効力感、自尊感情が高くなるように加算し、逆転項目は回答の数字を逆転して数量化した。分析は SPSS.Vr.15.0 を用い、自己教育力尺度の信頼係数、自己教育力の総得点と各側面の合計得点、GSES、SE の合計得点の平均を求め、調査時期で比較した。平均値の差は Mann-Whitney の U 検定を行い 5%水準で有意 ($p < 0.05$) とした。また、自己教育力と GSES、SE との相関関係は Spearman の ρ 検定を行い 1%水準で有意 ($p < 0.01$) とした。

6. 倫理的配慮

研究代表者が研究目的、調査内容、倫理的配慮(成績・評価と無関係であること、回答拒否や途中の棄権が自由であること、分析は全体集計を行うため個人が特定されないこと)について口頭で説明し、倫理的配慮を明記した書面を調査票と共に配布して協力を依頼した。回答は無記名、自記式とし、記入後、回収箱に自分で投函する方法をとった。調査への参加の承諾は、調査票の投函によって同意が得られたものと判断した。また、学生の調査協力が自由意志で行われるように、研究グループメンバーは趣旨説明と書面および調査票の配布のみを行い、回収にはメンバー以外の者が立ち会うようにした。尚、調査実施前に本学の倫理審査委員会の承認を得た(承認番号 18002)。

Ⅲ. 結果

自己教育力尺度の回答率が 95%以上、自己効力感尺度と自尊感情尺度は 90%以上の調査票を有効とした結果、有効回答は入学時が 136 名(有効回答率 98.6%)、1 期 134 名(有効回答率 97.1%)、2 期 123 名(有効回答率 96.1%)、3 期 125 名(有効回答率 96.1%)、4 期 109 名(有効回答率 96.1%)、5 期 98 名(有効回答率 96.1%)であった。

1. 対象者の属性

平均年齢は入学時 18.2±0.8 歳で、高校卒業後すぐに入学した者が多数であった。その他、所属

する学科人数、性別、入試形態、同居について各調査時期での差はなかった(表 1)。

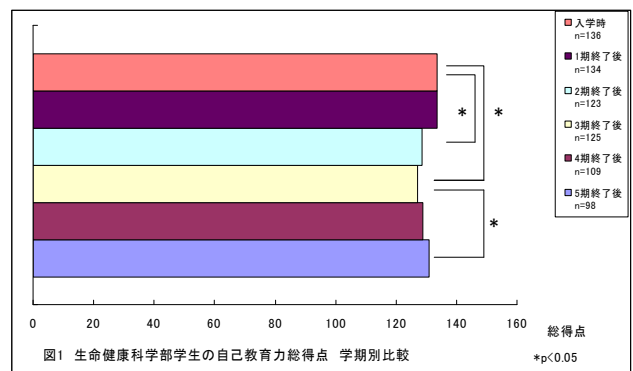
	入学時 n=136	1期(1年春学期) 終了後 n=134	2期(1年秋学期) 終了後 n=123	3期(2年春学期) 終了後 n=125	4期(2年秋学期) 終了後 n=109	5期(3年春学期) 終了後 n=98
平均年齢±標準偏差	18.2±0.8	18.7±1.1	19.2±1.0	19.7±1.1	20.1±1.0	20.7±1.1
学科						
保健看護	78 (57.4)	80 (59.7)	73 (59.3)	77 (61.6)	74 (67.9)	58 (59.2)
生命医科	58 (42.6)	54 (40.3)	50 (40.7)	48 (38.4)	35 (32.1)	40 (40.8)
性別						
女性	88 (64.7)	90 (67.7)	81 (66.9)	86 (68.8)	77 (70.6)	65 (66.3)
男性	48 (35.3)	43 (32.3)	40 (33.1)	39 (31.2)	32 (29.4)	33 (33.7)
入試形態						
一般	71 (52.2)	65 (49.2)	59 (48.0)	62 (49.6)	55 (50.5)	54 (55.7)
推薦	65 (47.8)	67 (50.8)	64 (52.0)	63 (50.4)	54 (49.5)	43 (44.3)
同居						
入学前	133 (97.8)	132 (99.2)	119 (96.7)	120 (96.0)	109 (100.0)	93 (96.9)
現在	118 (86.8)	116 (87.2)	108 (87.8)	105 (84.7)	92 (85.2)	80 (84.2)

2. 自己教育力

自己教育力測定尺度全体の信頼性を示すクロンバックの α 係数は、入学時 0.85、1 期 0.84、2 期 0.79、3 期 0.81、4 期 0.86、5 期 0.86 であり、すべての時期において確保されていた。各側面の α 係数は入学時 0.51~0.76、1 期 0.54~0.77、2 期 0.42~0.60、3 期 0.34~0.74、4 期 0.47~0.79、5 期 0.51~0.77 の範囲内であり、2 期と側面Ⅱに低い値が見られた。

(1) 自己教育力平均総得点

自己教育力平均総得点は、入学時 132.1 (SD±16.1)・中央値 133.5、1 期 131.2 (SD±16.1)・中央値 133.5、2 期 128.5 (SD±14.5)・中央値 128.5、3 期 126.7 (SD±14.8)・中央値 127.0、4 期 129.0 (SD±16.3)・中央値 129.0、5 期 129.2 (SD±16.2)・中央値 131.0 であり、2 期と 3 期の得点は入学時より有意に低く ($p < 0.05$)、5 期の得点は 3 期より有意に高くなっていた ($p < 0.05$) (図 1)。

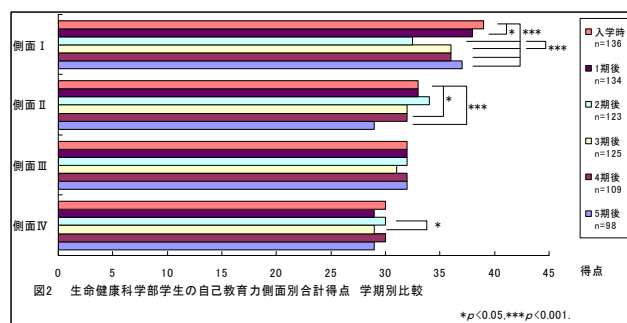


(2) 自己教育力測定尺度における 4 つの側面の平均合計得点

側面Ⅰ～Ⅳの各 10 項目ずつの平均合計得点は側面Ⅰが最も高かった。調査時期では高い順に入学時、1 期、5 期、3 期・4 期であり、中央値はそれぞれ 39.0、38.0、37.0、36.0 であった。一方、

最も得点が低いのは側面Ⅳで、1期・3期・5期の中央値は共に29.0であった。調査時期による4つの側面の順位は、入学時と1期、3期がⅠ>Ⅱ>Ⅲ>Ⅳであり、2期がⅡ>Ⅰ>Ⅲ>Ⅳ、4期がⅠ>Ⅱ・Ⅲ>Ⅳ、5期がⅠ>Ⅲ>Ⅱ・Ⅳであった。

(図2)。



①側面Ⅰ「成長・発展への志向」

側面Ⅰの平均合計得点は、入学時 38.6 (SD±4.6)・中央値 39.0、1期 37.6 (SD±4.6)・中央値 38.0、2期 32.7 (SD±4.7)・中央値 32.5、3期 35.3 (SD±5.2)・中央値 36.0、4期 35.7 (SD±5.5)・中央値 36.0、5期 36.0 (SD±5.6)・中央値 37.0であった。入学時に比べて他の時期の得点は有意に低く ($p<0.05$)、特に2期の得点は著しく低かった ($p<0.001$)。ところが、3期は2期の得点より有意に高くなった ($p<0.001$)。各質問項目のうち、2期より3期に上がった項目は「自分の能力を最大限にのばすよう、いろいろ努力したい ($p<0.001$)」「たとえ認められなくても、自分の目標に向かって努力したい ($p<0.001$)」「自分ではなければやれないことをやってみよう ($p<0.05$)」「社会に出てからよい仕事をし、多くの人に認められたい ($p<0.001$)」「これから専門的な資格や学位などを取りたい ($p<0.001$)」であった。反対に下がった項目は「いったい何のために勉強するのだろうか、といやになることがある ($p<0.001$)」「ぼんやりと何も考えずに過ごしてしまうことが多い ($p<0.001$)」であった (図2)。

②側面Ⅱ「自己の対象化と統制」

側面Ⅱの平均合計得点は、入学時 33.1 (SD±4.5)・中央値 33.0、1期 33.1 (SD±4.6)・中央値 33.0、2期 33.4 (SD±4.6)・中央値 34.0、3期 32.1 (SD±3.9)・中央値 32.0、4期 32.0 (SD±4.3)・中央値 32.0、5期 28.7 (SD±4.6)・中央値 29.0であった。入学時に比べて3期・4期の得点は有意に低下し ($p<0.05$)、特に5期は著しく低かった ($p<0.001$)。各質問項目のうち、入学時よ

り5期に低下した項目は「他の人から欠点を指摘されると自分でも考えてみようとする ($p<0.05$)」、「いやになった時でも、もうちょっとだけもうちょっとだけ、と頑張ろうとする ($p<0.05$)」であり、全ての項目の得点が低下していた (図2)。

③側面Ⅲ「学習の技能と基盤」

側面Ⅲの平均合計得点は入学時 31.3 (SD±6.2)・中央値 32.0、1期 31.5 (SD±6.5)・中央値 32.0、2期 32.3 (SD±4.6)・中央値 32.0、3期 31.0 (SD±5.0)・中央値 31.0、4期 31.8 (SD±5.5)・中央値 32.0、5期 32.0 (SD±5.2)・中央値 32.0であった。入学時からほとんど変化がなく、3期の得点が低い、その後回復している。各質問項目のうち、3期より4期に上がった項目は「自分の調べたいことがある時に図書館(室)を利用している ($p<0.05$)」、「自分に必要な文献や記録を分類・整理しておく習慣がある ($p<0.05$)」、「自分の調べたいことについて文献検索していくことができる ($p=0.07$)」であった (図2)。

④側面Ⅳ「自信・プライド・安定性」

側面Ⅳの平均合計得点は入学時 29.2 (SD±6.3)・中央値 30.0、1期 29.0 (SD±6.3)・中央値 29.0、2期 30.3 (SD±4.5)・中央値 30.0、3期 28.3 (SD±6.1)・中央値 29.0、4期 29.5 (SD±6.6)・中央値 30.0、5期 29.1 (SD±6.0)・中央値 29.0であった。入学時と2期、4期の中央値はともに30.0で、1期、3期、5期の中央値はともに29.0であるが、2期と3期の間に有意差が有り得点が低くなっていた ($p<0.05$)。各質問項目のうち、2期より3期に下がった項目は「今のままの自分ではいけない、と思うことがある (逆転項目) ($p<0.001$)」、「何をやってもだめだと思う (逆転項目) ($p<0.001$)」、「今の自分に満足している ($p<0.001$)」、「自分のことを、はずかしいと思うことがある (逆転項目) ($p<0.05$)」であった。また、反対に上がった項目は「他の人にばかにされるのは、がまんできない (逆転項目) ($p<0.001$)」、「今の自分が幸福だと思う ($p<0.001$)」であった (図2)。

3. 自己効力感

GSESの平均合計得点は入学時が 6.1 (SD±4.0)・中央値 6.0、1期 5.8 (SD±4.0)・中央値 5.5、2期 5.4 (SD±3.7)・中央値 5.0、3期 5.7 (SD±3.8)・中央値 5.0、4期 5.7 (SD±4.0)・中央値 5.0、5期 5.8 (SD±4.0)・中央値 5.0であった。

入学時と2期の間に有意差はないが得点が低くなっていた ($p=0.075$)。各質問項目のうち得点が高くなった項目は「何か決めるとき、迷わずに決定する方である ($p<0.05$)」1つのみであったが、有意な低下を示す項目はなかった (図3)。

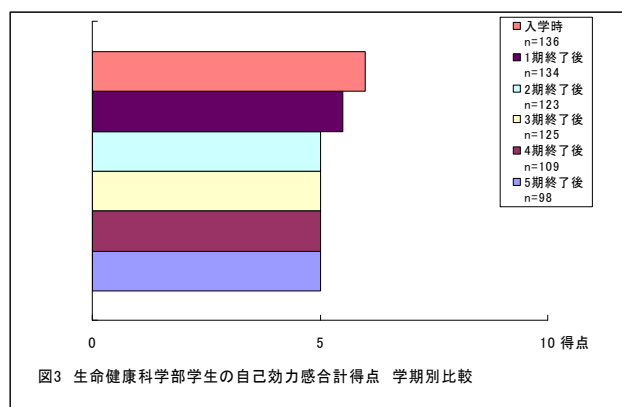


図3 生命健康科学部学生の自己効力感合計得点 学期別比較

また、GSES と自己教育力平均総得点、全ての側面とは正の相関関係が認められ ($p<0.001$)、総得点との係数は0.632、側面IVとの係数は0.652であった (表2)。

表2.自己教育力平均総得点と自己効力感・自尊感情との相関係数

	自己教育力総得点	側面Ⅰ	側面Ⅱ	側面Ⅲ	側面Ⅳ
自己教総得点	1.000***	0.711***	0.637***	0.804***	0.689***
自己効力感	0.632***	0.395***	0.298***	0.445***	0.652***
自尊感情	0.573***	0.292***	0.209***	0.345***	0.751***

***p<0.001

*** $p<0.001$

4. 自尊感情

SE の平均合計得点は、入学時が 30.4 (SD±6.6)・中央値 31.0、1期 30.0 (SD±7.6)・中央値 30.0、2期 29.9 (SD±6.9)・中央値 30.0、3期 26.6 (SD±5.9)・中央値 27.0、4期 30.3 (SD±7.2)・中央値 30.0、5期 30.3 (SD±7.4)・中央値 30.0であった。2期と3期、3期と4期の得点には有意差がみとめられた ($p<0.001$) (図4)。各質問項目のうち2期より3期に得点が有意に低下した項目は「敗北者だと思ふことがよくある ($p<0.05$)」のみであった。一方、3期より4期に高くなった項目は9項目あったが、得点が有意な変化を示したものはなかった。

また、SE と自己教育力平均総得点、すべての側面とは正の相関関係が認められ ($p<0.001$)、総得点との係数は0.573、側面IVとの係数は0.751であった (表2)。

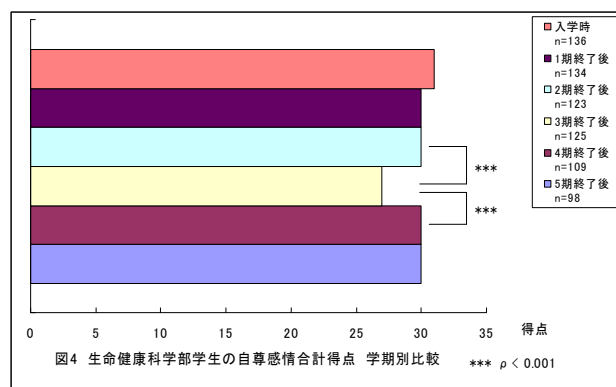


図4 生命健康科学部学生の自尊感情合計得点 学期別比較 *** $p<0.001$

5. 学習状況

(1)1日の自己学習平均時間

自己学習時間は、1期が1日平均 63.2 (SD±58.4) 分・中央値 60.0、2期が 52.5 (SD±41.4) 分・中央値 60.0、3期が 68.6 (SD±104.5) 分・中央値 60.0、4期が 67.3 (SD±58.6) 分・中央値 60.0、5期が 75.0 (SD±64.0) 分・中央値 60.0であった。最も少ない2期と最も多い5期の間には有意差が認められた ($p<0.05$)。

(2)情報システムの利用状況

インターネットでの情報検索は、1期が月平均 14.9 (SD±9.4) 日・中央値 14.0、2期が 14.7 (SD±10.0) 日・中央値 11.0、3期が 14.6 (SD±9.7) 日・中央値 15.0、4期が 15.1 (SD±9.5) 日・中央値 15.0、5期が 17.1 (SD±9.7) 日・中央値 20.0であった。最も少ない2期と最も多い5期の間には有意差が認められた ($p<0.05$)。

Tora-Net Web mail の利用日数は、1期が月平均 11.0 (SD±7.7) 日・中央値 10.0、2期が 8.4 (SD±6.8) 日・中央値 7.0、3期が 10.6 (SD±7.4) 日・中央値 10.0、4期が 9.6 (SD±8.1) 日・中央値 7.0、5期が 10.6 (SD±7.5) 日・中央値 10.0であった。最も多い入学時と最も少ない2期との間には有意差が認められた ($p<0.01$)。

Tora-Net ライブラリーの利用日数は、1期が月平均 8.4 (SD±6.7) 日・中央値 7.0、2期が 7.4 (SD±7.2) 日・中央値 5.0、3期が 9.0 (SD±8.3) 日・中央値 7.0、4期が 10.5 (SD±9.1) 日・中央値 10.0、5期が 10.5 (SD±8.8) 日・中央値 10.0であった。3期から徐々に増加しているが、有意差はなかった。

学部内視聴覚教材ビジュレーションの利用日数は、1期が月平均 0.9 (SD±2.7) 日・中央値 0.0、2期が 0.9 (SD±2.6) 日・中央値 0.0、3期が 0.6

(SD±1.7) 日・中央値 0.0、4 期が 1.5 (SD±4.0) 日・中央値 0.5、5 期が 1.8 (SD±2.9) 日・中央値 1.0 であった。4 期から月に 0.5 日程度の利用が始まっていた。3 期と 4 期、4 期と 5 期の間には有意差が認められた ($p<0.001$ 、 $p<0.05$)。図書館の利用は、1 期が月平均 1.6 (SD±3.2) 日・中央値 0.0、2 期が 2.0 (SD±3.7) 日・中央値 0.0、3 期が 1.8 (SD±3.7) 日・中央値 0.0、4 期が 1.6 (SD±2.6) 日・中央値 1.0、5 期が 2.9 (SD±5.1) 日・中央値 1.0 であった。4 期と 5 期に回数が上がった。入学時と 5 期、4 期と 5 期の間には有意差が認められた ($p<0.05$)。

(3) よく勉強したと思う科目

よく勉強した科目が「ある」と回答した者は 1 期が 62.7%、2 期 51.3%、3 期 59.8%、4 期 49.5%、5 期 59.3% であった。最も多い 1 期と少ない 4 期との間には有意差が認められた ($p<0.05$) (表 3)。

表3.よく勉強した、有益だった科目 (%)

		あり	なし
よく勉強したと思う科目	1期終了後 n=134	84 (62.7)	50 (37.3)
	2期終了後 n=117	60 (51.3)	57 (48.7)
	3期終了後 n=122	73 (59.8)	49 (40.2)
	4期終了後 n=99	49 (49.5)	50 (50.5)
	5期終了後 n=86	51 (59.3)	35 (40.7)
有益だった科目	1期終了後 n=132	104 (78.8)	28 (21.2)
	2期終了後 n=112	86 (76.8)	26 (23.2)
	3期終了後 n=120	85 (70.8)	35 (29.2)
	4期終了後 n=89	60 (67.4)	29 (32.6)
	5期終了後 n=85	63 (74.1)	22 (25.9)

よく勉強した理由は「課題のため」と回答した者は 1 期 25.4%、3 期 20.6%、4 期 20.2%、5 期 20.0% であり、この理由は一定の割合で継続していた。他に「興味深かった」と回答した者は 1 期が 22.4%、3 期 12.7%、4 期 14.9%、5 期 19.0% であり、「テストがあったから」も 1 期に 9.7%、3 期に 10.3% あった。

よく勉強した科目は 1 期が生化学、解剖・組織学、社会福祉学、2 期が微生物学、基礎看護援助論 I、病理学、3 期が薬理学、微生物学実習、4 期が看護過程演習、5 期が母性看護学演習などであった。

(4) 自分にとって有益だった科目

有益だった科目が「ある」と回答した者は 1 期が 78.8%、2 期 76.8%、3 期 70.8%、4 期 67.4%、5 期 74.1% であった。最も多い 1 期と少ない 4 期との間には有意差が認められた ($p<0.05$) (表 3)。

有益だった科目は 1 期が解剖・組織学、ふれあい実習、生化学、こころの科学、2 期が基礎看護援助論 I、基礎看護技術論 II、3 期が基礎看護援助論 II、4 期が生活援助実習、5 期が看護過程実践実習などであった。学内学外における実験・実習の授業がほとんどであった。

IV. 考察

1. 自己教育力の変化と側面との関連

本学部学生を対象とした自己教育力の調査では、平均総得点が入学時に比べて 2 期と 3 期に低かったが、5 期は 3 期より有意に高いという結果であった。先行研究⁹⁻¹⁴⁾では、入学 1 年後に自己教育力総得点が低下すること、2 年次あるいは 3 年次、演習や実習終了後には高くなることが報告されている。本学部学生の自己教育力の傾向も、先行研究と同様に、自己教育力は 1 年次から 2 年次に低下し、3 年次に高くなっていた。

このような変化の背景には、現実との直面、自信の喪失、進路の見直し等があり、演習や実習などの少人数教育や実践教育が主体的な学習につながるからではないかと言われている¹⁰⁻¹²⁾¹⁵⁾。

本学学生の場合、自己教育力総得点との間に強い相関関係が認められた各側面の変化と関連させながら検討する。側面 I 「成長・発展への志向」は、平均総得点との強い相関関係が認められている ($p<0.001$) (表 2)。質問項目から検討したところ、2 期は「目標に向かって努力したい」気持ちや、「資格・学位などをとり」「社会に出てからよい仕事をして人に認められたい」気持ちなどを失いかけており、気力が低下していることがわかる。反対に、3 期にはこれらの項目の得点が高くなり、5 期には入学時や 1 期の高さにまで近づいている。学生にとっての 2 期、3 期とは、専門科目が増え、内容も難しくなって、目標の達成困難感や自信喪失につながり易い時期である。しかし反対に、この時期に計画的で地道な努力をして自己学習を積み上げた学生は、その後の 4・5 期にその成果を確信できる可能性がある。

自己教育力平均総得点と側面 III 「学習の技能と基盤」の相関係数は 0.804 で最も強い相関関係が認められた ($p<0.001$)。さらに総得点と変化の時期も似ている (図 2)。側面 III の質問項目では図書館の利用や必要な文献や記録の整理が、4・5 期に高くなっている。自分の学習環境や学習方法を

発見し確立しつつある事が分かる。自分の学習方法を確立することは非常に重要なことであり、大学でこそ学修できるものである。今回の調査からは自己教育力が学習環境や学習方法の修得状況と関連していることが示唆された。

一方、側面Ⅱ「自己の対象化と統制」は2期が最も高く、5期が最低を示しているが、現時点でこれらを説明することは困難である。自己教育力の総得点は、卒業までの4年間で調査して全貌を明らかにする必要がある。また、各側面の変化についても平均総得点の変化とどのように関連しているのかを慎重に検討する必要がある。

2. 自己教育力と関連要因との関係

自己学習に関する調査では、学習時間、インターネット情報検索回数、視聴覚教材の利用回数、図書館の利用回数が5期に高いという結果が得られている。図書館の利用は側面Ⅲの質問紙項目でも、図書館の利用が自己教育力に関係がある可能性が示唆され、その重要性が示唆されている。しかし、図書館の利用目的が課題提出やテスト勉強である可能性が高く、自己学習につながっているのか疑問もある。ただ、図書館の利用や情報システムの活用は、自己学習の環境と方法を確保することにつながっており、森田¹⁶⁾は情報活用の実践力は自己教育力と情報化社会で必要とされる能力を育成する可能性を指摘している。今後はさらに学生の自主的な学習がすすむように、本学部の学生に合わせたe-learningや自己学習用の視聴覚システムを提案し、教育環境を整備する必要がある。

自己教育力と側面Ⅳは、GSES、SEとかなり強い相関関係を示していた。梶田³¹⁾は、側面Ⅳを他の3側面を決定する心理的基盤として位置づけた上で、SEとの関係を指摘している。以上のように、側面Ⅳ、自己効力感、自尊感情は、自己教育力の心理的土台であり、学生が主体的に目標を設定して生涯にわたって自己を教育し続けるための重要な関連要因である。

V. 結論

本学部において、自己教育力の入学時から3年春学期までの調査を行った結果、以下のことが明らかになった。

1. 自己教育力の平均総得点は、入学時が最も高く、3期に最低となり ($p<0.05$)、5期に増加した ($p<0.05$)。

2. 自己教育力の側面Ⅰは、入学時が最も高く、2期に最も低くなり ($p<0.001$)、3期、4期、5期には再び高くなった ($p<0.001$)。3期から4期は目標に向かって努力する気持ちや資格や学位の取得に関連する項目の得点が高くなっていた。
3. 側面Ⅱは、入学時より2期に最も高くなった ($p<0.05$) が、3期と4期に低下し ($p<0.05$)、5期にさらに低下した ($p<0.001$)。
4. 側面Ⅲは、入学時より3期が低くなり、4期と5期に回復したが、有意差はなかった。
5. 側面Ⅳは、入学時、2期、4期に高く、1期、3期、5期に低くなり波を描き変動した。2期と3期の間に有意差があった ($p<0.05$)。
6. 自己効力感は、入学時が最も高かったが1期に低下し、2期、3期、4期、5期が同値で最低を示した。
7. 自尊感情は、入学時が最も高く、3期が最も低下した ($p<0.001$) が、4期、5期に増加した ($p<0.001$)。
8. 自己教育力平均総得点と4つの側面、自己教育力平均総得点と自己効力感および自尊感情との間には正の相関が認められた ($p<0.001$)。
9. 視聴覚システム (VISUALEARN) の利用と図書館の月平均利用回数は、1期から3期より4期と5期が有意に増加していた ($p<0.05$)。
10. 自己教育力の得点変動は、自己効力感や自尊感情と強く関係しており、入学後の目標、視聴覚システムや図書館の利用などとの関連性も示唆された。

VI. おわりに

本研究では自己教育力平均総得点と側面Ⅰ、Ⅲとの関連性が高く、5期に得点が高くなることが明らかになった。側面Ⅰは、学生の成長と発展に必要な目的・目標をしっかりと設定することであり、側面Ⅲは、図書館の利用や情報システムの活用である。これらが自己教育力を高める可能性が示唆された。特に情報システムの活用では、視聴覚教材が自宅で自由に視聴できて、自主的な学習を支援する教材やシステム開発の必要性が示唆された。

今後も縦断的に自己教育力、自己効力感、自尊感情、学習状況を調査して、卒業までの4年間の変化を明らかにし、教育内容との関連性を総合的

に検討する必要がある。

謝辞

本調査にあたり、快くご協力いただいた本学の生命健康科学部生命医科学科と保健看護学科の学生および教員の皆様に心よりお礼を申し上げます。尚、この研究は平成20年度中部大学生命健康科学研究所研究助成を受けて行った研究成果の一部である。

参考文献

- 1) 牧野典子,中山奈津紀,堀井直子他:生命健康科学部学生の自己教育力—第二報 入学後1年間の自己教育力—,中部大学生命健康科学研究所紀要,21-28,2008.
- 2) 文部省編:「自己教育力」の育成などの視点を提起—中教審教育内容等小委員会が審議経過を報告—,文部時報,26-43,1983.
- 3) 梶田叡一:自己教育への教育,36-53,明治図書,1985.
- 4) 堀文子,牧野典子,渡邊実香他:看護大学生の自己教育力育成に関する研究—学生の自己教育力に関する研究の動向—,中部大学生命健康科学研究所紀要,7-19,2006.
- 5) 堀文子,牧野典子,山田聡子他:生命健康科学部学生の自己教育力—第一報 入学時における自己教育力の実態—,中部大学生命健康科学研究所紀要,13-19,2007.
- 6) 西村千代子,奥野茂代,小林洋子他:看護婦の自己教育力,日本赤十字社幹部看護婦研修所紀要第11号,9-39,1995.
- 7) 坂野雄二,東條光彦:セルフ・エフィカシー尺度,上里一郎監修:心理アセスメントハンドブック,西村書店,478-489,1993.
- 8) 山本真理子,松井豊,山成由紀子:認知された自己の諸側面の構造,教育心理学研究,30,64-68,1982.
- 9) 岩永秀子,山本昇:看護学生の自己教育力におよぼす看護婦イメージの影響,日本看護学教育学会誌,7(3),17-28,1997.
- 10) 多久島寛孝,永田華千代,北野正文他:医療系大学在学中の学生の自己教育力の推移,保健科学研究誌,№2,95-108,2005.
- 11) 南修子,園田麻利子,七川正一他:成人看護学実

習における学生の自己教育力に影響する要因の検討,鹿児島純心女子大学看護栄養学部紀要,10,26-37,2006.

- 12) 坪田和美:看護基礎教育における自己教育力,看護教育,44(3),242-244,2003.
- 13) 新實由香理:看護学実習における自己教育力と授業過程評価の変化およびその関係,長野県看護大学紀要,6,61-71,2004.
- 14) 高橋江美子,小越佐知子:学生の自己教育力の傾向—看護教育シミュレーター法による学内演習前後の比較—,第31回看護教育,45-47,2000.
- 15) 高橋正子,遠藤英子,加藤千晶他:看護学生の自己教育力の変化とカリキュラムとの関連—医療短期大学2001年度入学生の縦断的調査—東邦大学医学部看護学科・東邦大学医療短期大学紀要,第18号,22-36,2004.
- 16) 森田敏昭,清水益治,石田潤他:大学生の自己教育力と情報活用の実践力および情報化社会レディネスとの関係,広島大学大学院教育学研究科紀要,第一部,第52号,1-8,2003.
- 17) 梶田叡一:自己意識の心理学,94-97,東京大学出版会,1992.
- 18) 酒井明子:看護学生の自己教育力に関連する要因—Self-esteemの高低に焦点をあてて—,福井医科大学研究雑誌,1(1),113-128,2000.

著者プロフィール

牧野 典子 (Tsuneko MAKINO)

中部大学生命健康科学部 保健看護学科 教授。
愛知淑徳大学大学院現代社会研究科現代社会学専攻博士後期課程修了。修士(国際教育)。専門分野:成人看護学、急性期看護学、災害看護論。湖西市立総合病院、浜松市立高等学校衛生看護科、静岡県立大学短期大学部、中部大学生命健康科学研究所を経て現職。主な研究テーマは①成人急性期看護学実習における学生の学習環境に関する研究、②災害看護の教育方法、③看護職のキャリア形成、④手術看護の専門性に関する研究